

## (資料2)

研究課題	2	ヘア・トラップ法によるツキノワグマの生息動向と個体数推定法の開発
研究目的・背景		ツキノワグマ（以下、クマ）は絶滅の恐れがある野生動物として位置づけられている。しかし各地で農林業被害や人身事故が頻発し、大きな社会問題となっている。県は 2003 年度からクマとの共存を目指して特定鳥獣保護管理計画を実施している。近年、全国的な傾向として 2～3 年おきにクマが人里へ大量出没し、その多くが捕殺され、個体数の急減が危惧されていることから、各年の精度の高いトレンド追跡が喫緊の課題となっている。そこで本研究ではヘア・トラップ調査のモデル地域を設定し、個体群のトレンドを把握することを目的とした。そして近年、捕獲数を用いた階層ベイズ法による個体数推定方法などの新たな統計シミュレーションモデルが構築されていることなどから、継続したヘア・トラップ調査の結果を組み入れる統計シミュレーションモデルを試行し、岩手版の生息動向と個体数推定法を確立することを目的とした。
研究内容		(1) モデル地域の選定ならびにヘア・トラップ調査の実施（平成 24～28 年度） (2) シミュレーションモデルへの応用（平成 25～28 年度） (3) モニタリング調査法の確立（平成 26～28 年度）
評価結果		○総合評価 A(3人)・B(2人)・C(人)・D(人) ○総合意見 ・ヘア・トラップ法に関しては既に有用な成果が得られている。本研究は統計的手法を用いた新たな個体数推定法の開発であり、地域性を考慮した重要な研究であると判断できます。成果を期待しております。 ・メリハリのきいた研究を継続して結果を出しており評価します。 ・本研究は社会的なニーズがあり、新しい研究手法を用いて科学的にツキノワグマの生息動向と個体数を推計しようとするものであり評価できる。 ・本研究手法は、他の野生生物の調査に活用できると思われる。研究成果の公表（論文）を期待する。 ・最終年度には、ヘア・トラップ法についてのマニュアルができることを期待します。
センターの対応方針	1	研究計画のとおり実施  ツキノワグマの保護管理は社会的な要請が大きく県民の関心も高い一方で、その生態は不明な点が多いことから、遺伝子解析法を用いたツキノワグマのモニタリング調査手法の成果を基に統計的手法を用いた新たな個体数推定法を開発することは、生息動向と個体数推定法を確立するためにも有効である。今後ともその成果を自然保護対策に広く活用できるよう取り組みたい。また、同様の研究を行っている研究機関との連携を深めるとともに、研究成果をわかりやすくとりまとめ活用を図っていきます。